

編集後記

日本医史学雑誌第61巻4号をお届けいたします。今号も原著2編を含め、盛りだくさんの内容となっています。また、寄せられる投稿数も幾分回復してきており、編集委員として胸をなでおろしています。とはいえ、例年に比べて十分な投稿があるとは言いかねる状況に変わりはなく、編集委員一同、皆様からの投稿をお待ちしております。

さて、一昨年前より本誌編集委員の末席に名を連ねておりますが、同時期から編集委員会では投稿原稿の査読をお願いする会員を一原稿につき二名に増やしています。会員の皆様にはご負担をおかけしているのですが、私などの目からみても、査読者を二名にすることにより査読にある種の“深み”が出て誌面が充実していることが感ぜられます。学識豊かな会員と新進気鋭の会員、あるいは医学に造詣の深い会員と歴史学に熟達した会員、といったように組み合わせられた二名の査読者、それと論文著者が“化学反応”を生ずる過程を目の当たりにできるときは、編集委員冥利に尽きる思いです。

恥ずかしながら、当初私は、あまりに論文著者に近い関係の会員は査読者にすべきではないと考え、また実際口にしていたのですが、やはり近い関係ならではの“化学反応”というものがあつた、これを否定しては、私自身が昨年の編集後記で書いた本誌の“文人的”な良さを台無しにしてしまう、ということに今更ながら思い至りました。小義にこだわっていた自分を思いおこすと汗顔の至りです。

昨年と同じ引用となつてしまい恐縮ですが、やはり「変わらずに生き残る為には、変わらなければならない」(映画「山猫」(1963年、ルキーノ・ヴィスコンティ監督))。投稿された論文も査読者二名との“化学反応”によって、より説得的にその意図を読者に提示することができるのではないのでしょうか。私自身も会員として論文を投稿して“化学反応”に参加しなければならないので、自戒を込めつつ。

(逢見 憲一)